天気予報
（今日・明日・明後日）
気象台ホームページ

北海道農産協会

令和５年

水稲病害虫の防除対策

ポイント

- 代かき後の残さ物等の搬出、適切な処分や水田畦畔の草刈りなど水田周辺の圃場衛生管理に努めます。
- 圃場観察、モニタリング調査等により病害虫の発生消長を確認し、発生状況に応じて防除の要否を判断します。
- 農薬散布時は登録内容を確認すると共に、周辺作物、有用生物等への影響がないよう飛散（ドリフト）防止対策を講じます。

トピック　イネキモグリバエ（イネカラバエ）について

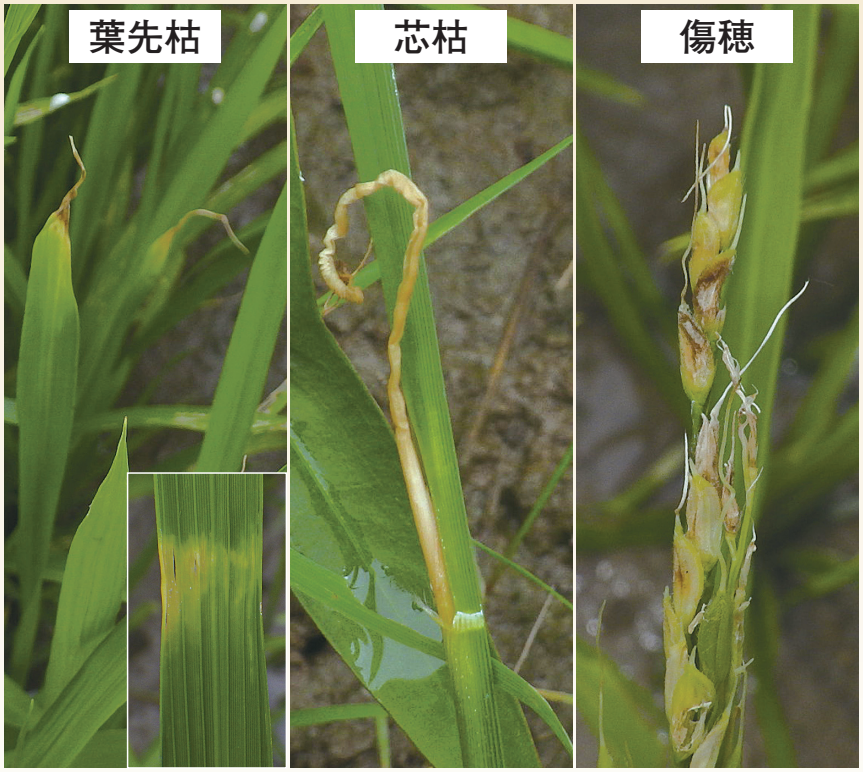

写真１　イネキモグリバエによる被害（中央農試　下間原図）

本害虫は稲の葉裏や葉鞘に産卵し、ふ化後の幼虫が茎内に潜入します。幼虫は抽出前の葉や穂を食害し、写真１のような被害をもたらします。

これまで道南地方、後志地方の一部で被害が確認されていましたが、昨年は、道央の水田において本種による被害が広く認められました。これまで発生のなかった水田においても本年の発生経過に注意が必要です。

令和５年に特に注意を要する病害虫
（北海道病害虫防除所）

2023 年 6 月

北海道／道総研農業研究本部／ホクレン／北集／北海道農産協会　　米 No.2

ばか苗病菌の胞子飛散を防ぐ

■ばか苗病菌の胞子は遠くまで飛散するため、水稲の種子生産に甚大な影響を及ぼします。
■採種圃場だけではなく、周辺圃場も含めてばか苗病の発生には注意が必要です。
■種子を保管する納屋や育苗ハウス周辺に稲わら、籾殻が残らないよう清潔にします。

本田での伝染と処理方法

○**本田での症状**：発病個体は徒長・黄化し、出穂期頃までに枯死し、株元には無数の胞子を作ります（写真２）。
○**胞子の飛散**：胞子は数百メートル飛散するとされ、出穂・開花期の健全籾に付着すると、その籾は汚染種子として翌年の発生源となります。

写真２ 枯死株に作られた胞子

○**罹病株の処理方法**
□出穂までに、枯死前の罹病株を株ごと抜き取る
□疑わしい徒長株・黄変株も抜き取る
□抜き取った株は、圃場外に搬出し土中に埋める等、適切に処分する

いもち病対策を万全に

感染源を圃場外へ搬出

○補植用の残り苗や代かき後にすくい上げた残さ物等は圃場外で適切に処分します。

早期発見のポイント

○**水田内見回り時期**
BLASTAM（ブラスタム）を活用して、効率的に見回りましょう。

BLASTAM
（北海道病害虫防除所）

□感染好適日の約１週間後が見回り適期
□好適条件が連続する場合は要注意
□葉いもちを発見したら、直ちに茎葉散布
○**見回り場所・方法**
□いもち病が発生しやすい場所
・前年の発生場所　・葉色が濃い場所
・風通しの悪い場所
□10mを4か所程度、稲株をかき分け、下葉を重点的に観察

耐性菌の発生に注意

■MBI-D剤は道内各地で耐性菌が確認されています。防除効果が十分に得られていない水田では使用を控えましょう。
■QoI剤（メトキシアクリレート系剤)も耐性菌が確認されているため、年１回の使用とし、体系防除時は、作用性の異なる薬剤と組合せます。また採種圃および周辺圃場では使用を控えてください。

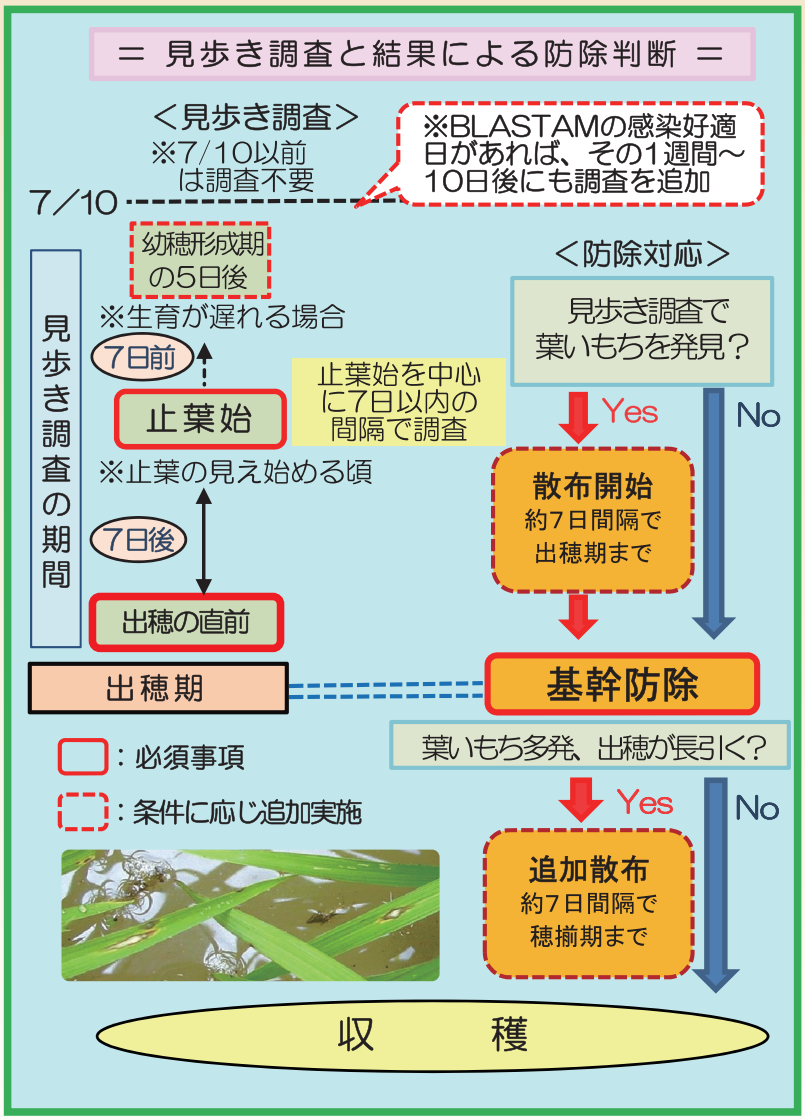

図１　いもち病の見歩き調査と防除体系

イネドロオイムシの防除要否判断

○防除要否の判断
1卵塊／株以下の密度では減収とならないので、「北の虫見番」を活用して防除の要否を判断しましょう。

「北の虫見番」
（北海道病害虫防除所）

○薬剤感受性の低下
イネドロオイムシでは、過去に有機リン系、カーバメイト系で薬剤抵抗性個体が確認されており、近年地域によってはネオニコチノイド系及びフィプロニル系剤においても、薬剤感受性の低下が見られています。

○効果的な防除と薬剤選択：
抵抗性個体が確認された地域では、作用性の異なる薬剤によるローテーション防除を実施しましょう。その他の地域では、前年までの防除効果を再検討した上で、薬剤を選択します。

写真３　イネドロオイムシの①卵塊、②食葉被害の様子、③成虫

紋枯病と赤色菌核病の発生に注意

■令和４年は紋枯病の発生がやや多い年でした。
■前年の成熟期の防除要否の判断基準に達した圃場では防除を行ってください。
■来年度に向けて、本年の成熟期に両病害の被害程度を確認し防除要否を判断しましょう。

○紋枯病
高温性の病害で、茎（稈）を枯らします（写真４の①）。茎（稈）にできた菌核（写真４の②）が圃場に残り、翌年の発生源になります。

○赤色菌核病
赤色菌核病は紋枯病と類似する病斑ですが、重症株は罹病部が枯死し、稈が折損します。病斑上には黒い菌核は形成されず、収穫時期になると葉鞘の内側にオレンジ色の菌核（写真５の③、④）が形成されます。

写真４　紋枯病の病徴と菌核

写真５　葉鞘に形成されたオレンジ色の菌核（赤色菌核病）

紋枯病と赤色菌核病の対策

前年の成熟期に
防除要否を判断

調査：10株×5ヶ所
（圃場の縁～内部）
判定：成熟期の発病度40
（＝病斑高率 35%）
止葉葉鞘まで紋枯症状が散見される程度に達したら翌年に防除

■防除対策の選択（AまたはB）

A　紋枯病・赤色菌核病の両方に有効
育苗箱施用剤（略）または 水面施用剤（フラメトピル粒剤、シメコナゾール粒剤）を使用

B　紋枯病には以下も有効
茎葉散布（無人ヘリ　または　地上散布）
薬剤は　チアメトキサム・アゾキシストロビン水和剤Ｆまたはフルトラニル水和剤Ｆ の効果が高い
散布時期は出穂20日前 と 出穂期の２回散布

モニタリングを利用したカメムシ防除

■「出穂期」と「出穂から7日後」は基幹防除です。基幹防除以降はモニタリング調査（すくい取り・フェロモントラップ）により防除の要否を判断しましょう。
■水面施用剤や残効の長い成分を含む剤を使用することで、防除回数の削減も期待できます。

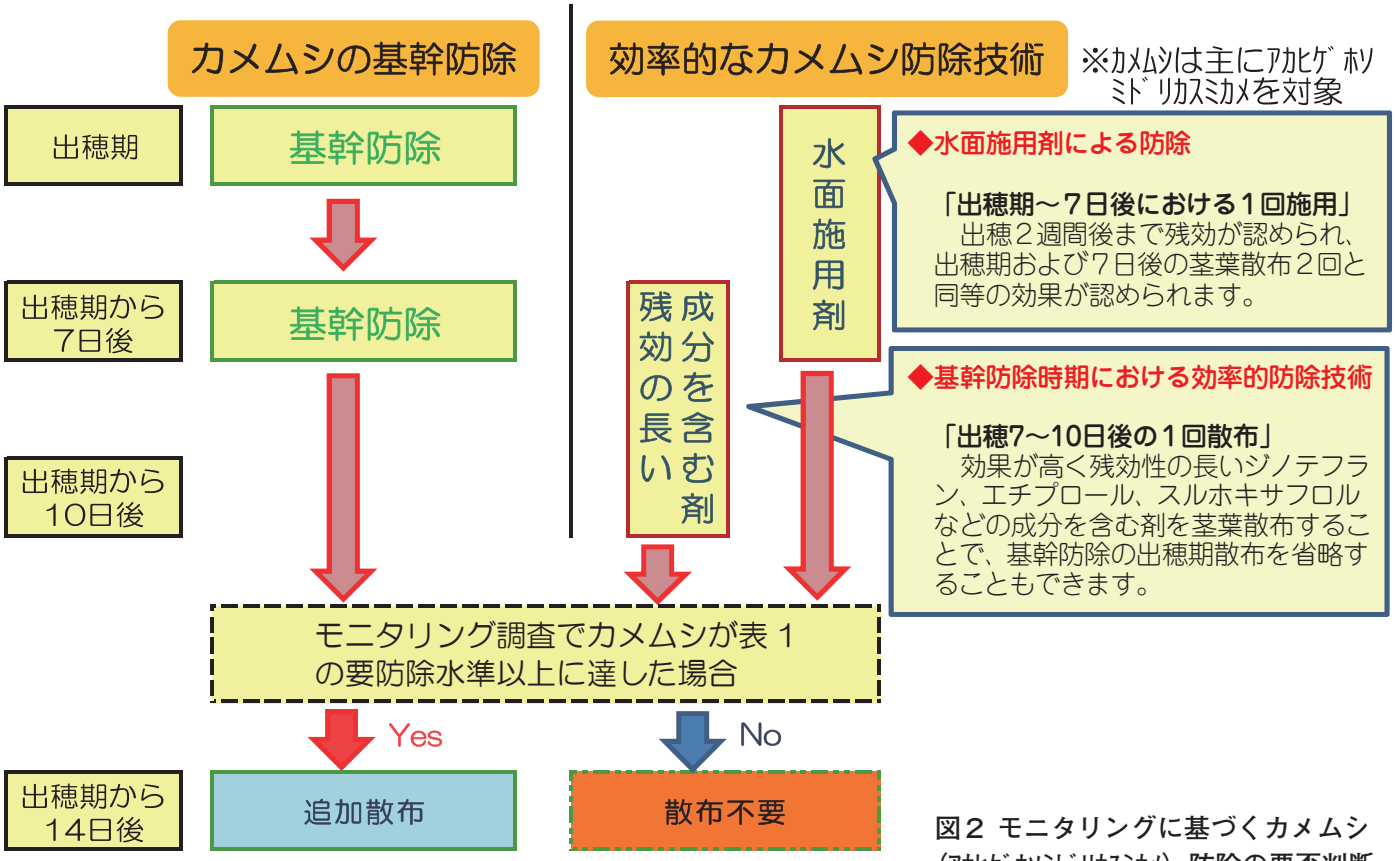

図２ モニタリングに基づくカメムシ（ｱｶﾋｹﾞﾎｿﾐﾄﾞﾘｶｽﾐｶﾒ）防除の要否判断

表１　割籾歩合ランクに対応した追加防除の要防除水準

（「令和５年度北海道農作物病害虫・雑草防除ガイド」より）

割籾歩合ランク[1]	主な品種[2]	要防除水準	
		20回振りすくい取り捕獲虫数	フェロモントラップ捕獲虫数
少	きたくりん、吟風	３頭	—[3]
やや少	ゆめぴりか※	２頭	—[3]
中	きらら397		2.2頭／７日間
やや多	ななつぼし※	１頭	—[3]
多	ほしのゆめ		1.2頭／７日間

注１）Ｒ３年度に改定された新たな割籾歩合ランクを示す。　注２）※は割籾ランクに基づいて当てはめた品種
注３）ーはデータが無く要防除水準を設定できない。

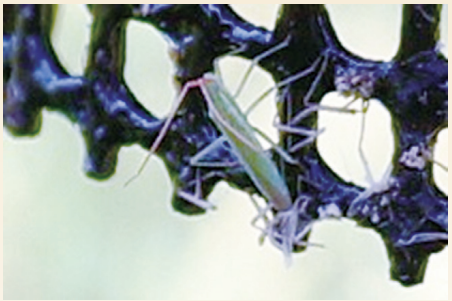

写真６　フェロモントラップに誘殺されたカメムシ

農薬散布上の留意点

①農薬散布に当たっては、示されている使用基準や使用方法、注意事項等を確認の上、適切に使用します。
②散布前は服装、使用器具などの確認・点検を事前に行い、散布時においては接触や吸引を回避するよう心掛けます。
③通常散布では登録されていても、有人ヘリコプター、無人ヘリコプター、速度連動式地上液剤少量散布機などの散布方法では、登録の無い場合もありますので注意してください。
④農薬の飛散防止のため、粉剤の使用を避け、液剤や粒剤などで対応してください。
⑤周辺に他作物や有用生物（家畜、ミツバチ等）がある場合は、薬剤散布方法・時間帯などについての事前連絡等に配慮しましょう。
⑥農薬の散布はミツバチの活動が盛んな時間帯（午前８時～12時頃）を避け、早朝や夕刻に実施しましょう。

執筆者：北海道農政部生産振興局技術普及課　主査（普及指導）上田朋法